

「ノロ」と「ユタ」の祈りに関する一考察

片本 恵利

1. はじめに

心理臨床の営みは、臨床心理学と言う学問に基礎を置いたArtであり、「神」などの超越的・絶対的な存在を前提としていない。しかし、心理臨床に携わっている者は、クライアントに揺り動かされ、思わず祈るような気持ちにさせられることがしばしばある。そもそも古代にあっては「病」は患者、あるいは共同体「全体」の何らかのバランスが崩れた結果生じるものと考えられており、「信仰に仕え、神の儀式に奉仕する者を指して「セラピスト」(古代末期の医者ガレーノス Galenos によれば、心の信仰に仕える人を指す)とよんでいた。(中略)病や痛みを身体因、心因と明確に分けるより、たましいからの語りかけであるという視点に立つと、祈りはこの声に応答しようとするものである。」(林、1992)。

精神医学、臨床心理学でも、シャーマニズムなどの非近代的治療文化への関心は連綿としてあった。中井(1990)は、文化精神医学者を七つのタイプに分けている。そのうち、第五のグループとして、「自国の文化にたいする文化精神医学的切り込みを自国での臨床体験にもとづいて行う人たち」を挙げ、おそらく現在の文化精神医学のもっとも優れた部分を代表する、と述べている。「レヴィ＝ストロースが文化人類学の存在理由にふれて述べたごとく、行きづまった近代文明の更新の契機を非近代社会に学ぼうとする動きは、なお、文化精神医学においては明確でなく、私の知る限り、これを明言している人はスイス系カナダ人学者アンリ・F・エランベルジェ(エレンベルガー)のみである。(中略)彼は、精神療法の未来を世界各地の(すでにほろんだものも含めて)ネイティブな精神療法に求めるべきことを高唱している。最も第一級の精神科医ジャネ、ベーネディクト、ユング、そしてフロイトさえもがヨーロッパ国内の非正当的医学、呪術、降神術などに関心を示してきたことを考え合わせるならば、問題は早くから表皮一枚下まで成熟していたのかも知れない。」(中井、1990)。井上(2006)他も、こうした非近代的治療文化への関心に基づいた心理臨床学的研究を行っている。

筆者は、主に沖縄本島北部において、スクールカウンセラーとして心理臨床活動を行いつつ、ノロやユタ、根神(後述)と呼ばれる沖縄の宗教的職能者をたずね、フィールドワークを行ってきた。本稿では、沖縄の宗教的職能者の「祈り」と心理臨床について考えてみたい。

「哲学事典」によれば、祈りとは「宗教におけるもっとも重要な行為。広く言えば神へ心をむけ高揚するいっさいのことを意味し、狭義には人格的なる神々に対しその恵みを願うこと。あるいは総じて神との人格的交通と考えられる。(後略)」(下仲、1971)とある。「宗教学辞典」は、次のように説明している。「[定義] 祈りとは広義において人間と神との内面的交通、生ける人格的接触、対話である。この意味での祈りをあらゆる宗教現象の中心とみる点において、多く

の宗教家、宗教学者、神学者の意見は一致している。(後略)」(大嶺、1973)。

本稿では「祈り」の意味をごく広くとり、「神などの他界・異界への存在への働きかけ、交通(の試み)」と考えることとする。なお、「神」「他界」「異界」なども厳密に定義を踏まえようとするれば本稿の手に余るし、「神」とは最終的に定義を拒否する語彙である、とも言える。ここでは「神など」は「特定の宗教の、あるいは名前がつけられているような特定のものではなく、ごくひろく人間存在を超えた超自然的な力全般(自然の力なども含む)」を指し、「他界・異界」についても、学問的に妥当で正確な定義としては不十分であるが、ここではある人にとっての「異界」・「他界」とは、「自らが生活する現実とは枠組みを異にする世界で、原則として往来することが不可能なところ」とする、にとどめたい。

2. 「ノロ」と「ユタ」

沖縄の宗教的職能者として、「ノロ」と「ユタ」が挙げられる。これらについては、呼称のバリエーションも広く、また、定義・分類もさまざまで、互いに重なったり補い合ったり、地域によって違いが見られたりすることも先行研究が明らかにしているとおりでである。佐々木(1991)は、「ノロがある状況においてユタに化していくという場合があり、ユタがある状況に置いてノロ化するというところもある」とし、村の祭司職などをめぐって問題がおきたような時に「異型の、シャーマンからプリーストへ、プリーストからシャーマンにというケースがでてくる」と述べている。ここでは、「ノロ」と「ユタ」について、辞書的な意味を押さえた上で先行研究の代表的なものを取り上げ、ごく大まかに整理するにとどめたい。

(1)「日本民俗大辞典」(福田他、2000)によると、「ノロ」「根神」「ユタ」は以下のように記述されている。

1)「ノロ」は「祝女(ヌル)」と表記されている。「祝女(ヌル)」とは、「奄美・沖縄諸島で村落祭祀を司る女性祭司の長。(中略)村落の祝女(原文では「祝」。誤植か。)と宮廷の君とは王国の女性祭司の二大区分であった(『中山世鑑』など)。琉球王国の時代、祝女は聞得大君を長とする王国の祭司制度の末端に位置付けられ、王府から就任の認可や役地の給付を受け、同時に祭祀内容の統制を受けた。」その特徴として、以下の7点が挙げられている。

- (一) 大概複数のシマ(村落)に一名で、シマごとにいる根神以下の祭司を束ねて祭にあたる。
- (二) 出身のシマ(村落)名を冠して呼ばれる。
- (三) 原則として特定の旧家やその父系親族集団の女子に受け継がれる。
- (四) 国頭地方では祝女不婚の伝承が根強いが、古い辞令書にも娘の例があり、祝女が子を持つことは事実として忌避されなかった。
- (五) 祝女ヌルドワンチ殿内の祭祀、祭具、祝女地などを代々受け継ぐ。
- (六) 村落祭祀、公共の祈願の担い手であり、原則として個人の祭祀、私的祈願に関わるべきでないという意識が強い。
- (七) 原則として終身務める。

「このような公儀祝女の様態は近代化の進展とともに徐々に揺らぎ始め、祝女の祭祀圏の崩壊、祭具・財産・伝承知識の喪失、従来の系譜に依らぬ祝女の誕生などが起こり、近年では後継者不足が深刻になって祭司組織の存続を脅かしている。今日、祝女をめぐる宗教的状况は社会や生活様式の変化、ユタの介入などによって流動化しており、現状の緻密な観察と動態的把握が求められる（後略）。」（高梨、2000）

2) 「根神（ニーガン）」とは、「沖縄本島と周辺離島において、村落の草分けの家（^{ニイヤ}根屋・根所・元屋）やその一門から選出される女性祭司。ニガミとも発音する。複数の村落の祭祀を束ねる祝女の下、一つの村落には一名もしくは二、三名の根神がおり、さらにその下に居神・脇神などさまざまな名称を持つ下位の祭司が多数いて、全体として村落の祭祀組織を形作っている。（後略）」（高梨、同）

3) 「ユタ」とは、「沖縄本島および広く南西諸島においてトランス（変性意識）状態で託宣・ト占・祈願・治病などを行う民間巫女。男性もいるがごく少数。その性格はすこぶるシャーマニクである。（中略）ユタの役割の多くは祭壇前で行われるハンジ（判断）である。（中略）ユタは祝女や神司などととも南西諸島の民俗宗教とくにシャーマニズムを代表する宗教者で現在も人びとの強い信仰をあつめている。ユタが多くての依頼者・信者をあつめ教理を創りだし、新宗教集団を形成するに至る例もある。」（佐々木、2000）

（2）桜井徳太郎

「沖縄地域の民間社会における呪術—宗教的局面的担い手は、女性神役（祭司）のノロ（祝女）、ニイガン（根神）、サス、ツカサ（神司）などのカミンチュ（神人）と、シャーマンとして活躍するユタ（沖縄本島中心）、カム（ン）カカリヤー（神懸り、宮古島）、ニゲービトゥ（願い人、八重山群島中心）、カンピトゥ（神人、八重山中心）などの類である。

このうち前者は、主としてウタキ（御嶽）、グシク（城）などの聖地やグワンジヨ（御願所）とかハイショ（拝所）などの聖地遥拝所の宗教行事を司祭するもので、もっぱら部落・村落の公的祭祀や共同体の祈願行事に主役を果たしている。これにたいし後者は共同体内の個々の家や家族に関する運勢とか吉凶の判断、禍厄の除災、病気の平癒祈願など、民間の私的な呪術信仰的領域に関与する。カミンチュはもっぱら聖地に鎮座する祭神の司祭にあたり、死穢とか婦人の血の忌み、出産の不浄を忌避する潔斎の観念が強い。ところがユタなどはこれと反対に死者儀礼や死者供養に密着している。一般にユタに比してノロの地位が高い。」（桜井、1973）。

（3）佐々木宏幹

「沖縄本島では、かつて村ごとに総本家となるニイドウクル（根所）の主人であるニンチュ（根人）の姉妹がニイガン（根神）、アンジ（按司＝八、九世紀頃村々を併合した郡制度の鎮域を統治した）の姉妹や妻はノロ（祝女）と呼ばれた。ニイガンもノロも神がかりして、前者は村レベル、後者は郡レベルの人々の生活に指針を与え、ニンチュやアンジの統治を助けた。ニイガンやノロに憑依する神霊は、それぞれの土地に設定された聖なる樹林（ウタキ）に降臨するウヤガン（祖神）であった。後になるとニイガンやノロは祭司化し、シャーマンの機能はユタ

と呼ばれる女性に移っていく。アンジ時代のノロは最高の祭祀的主権者としてアンジとの二重主権を確立していた。しかるに国主時代のノロは王府の行政機関の一翼として村に派遣された村落祭祀担当の下級巫女にすぎなくなった。ここでは国家統一と中央集権化に伴って、シャーマンの側面または性格は下降し拡散してゆき、他方祭司的側面は上昇して制度化される事実が見られる」(佐々木、1983)。

また佐々木はシャーマンの宗教—社会的役割について、他の職能者と互いに交錯し重複しあっているのが実情であると前置きした上で、ノロとユタをこれに当てはめて整理している。「僧侶(=プリースト)によって死者の霊は此岸から彼岸へと化導されるのに対して、シャーマンは、死者の霊を彼岸から此岸へと呼び戻し(口寄せ)、生者との間に対話の機会を作る。また僧侶は秩序の維持・統合を促進させる役割を果たすのに対して、シャーマンは個人的危機感、緊張感を解消させる役割を果たす。「両者の果たす役割の性格・内容・方向は異なっても、それぞれが相補って、住民の全体的宗教問題の解決に貢献していることになる。」「前者(ノロ)は集団的儀礼の執行者として一定社会の秩序維持の役割を果たすという意味においてプリースト的であり、後者(ユタ)は神がかり状態を現出させて、個人的・現実的困難事の解決を目指す儀礼を行うという点においてシャーマン的である」(佐々木、1983)。

さらに佐々木(1991)は、伝統を維持する力が祭司職にはあり、シャーマンにはそれを壊す力、革新性や刷新性があると説明し、「大胆な仮説」として、「ノロもユタもシャーマニスティックな同一の基盤にあったが、村落構造の発展とともにシャーマンだけでは秩序が守れなくなるので、祭司職という地位に神聖性をつけた存在が出て、シャーマンは邪魔になり、弾圧される。ところがそのシャーマンもいつの間にか祭司化、保守化して現実が動かないと、またシャーマンがでてきて保守化したものを批判する」、と述べている。

(4) 高江洲義英は、「ノロ系列とユタ系列の相違」として、次のような表を掲げている。

- | | |
|---|--|
| { | ノロ系列(ノロ・ツカサ): 共同体祭祀、豊年祈願、公的地位、世襲制、尊敬 |
| { | ユタ系列(ユタ・カンカカリヤ): 個人祈禱、死霊供養、私的活動、神懸り、弾圧 |

さらに、「ユタの機能と役割—ユタ・コンプレックスと事例検討—」として、ユタの役割について次のように整理している。

- 1) 予言者的役割(ト占など) 来談者の要請に応じて各種のハンジ(判示)やアカシ(証)を行い、個人、家、共同体の未来を占う。
- 2) 司祭者的役割(祈禱など) トートーメーウグワン(位牌御願)やグワンズグトゥ(元祖事)を中心に、家や門中の祈願から、時には共同体の祭儀にも関与したりする。
- 3) 呪術者的役割(巫医など) 口寄せや除災などの各種の巫儀をはじめ、マブイグミ(魂籠め)や各種の呪法による治療を施す。

続いて 1) ~ 3) のそれぞれについて、他の社会機能への移行の方向性を示し、現代沖縄人の取るべき姿勢について次のように総括している。「基層文化に共感しつつ、自らのコンプレックスを解きほぐしていくという態度であり、性急な〈短絡反応〉や強引な〈反動形成〉によっ

て、二者択一的にユタを否定しようとする暴論に陥らないこと」が重要で、「古琉球から続いてきたノロが消滅し、ユタもまた近代化の波に消し去られようとしつつある時代に、古琉球のアイデンティティーをいかに後世に伝えていくか、大きい任務」がある（高江洲、1993）。

以上のように先行研究を見ると、「ノロ」と「ユタ」は、以下のように捉えられてきた、と言える。

「ノロ」＝公的、祭司的、神への祈願、浄、

「ユタ」＝私的、シャーマンの、死者との交信、不浄

そして、「ノロ」と「ユタ」はもとは一つのものであったかもしれないが次第に機能が分化し、「ノロ」は世襲の公務員的な性格を強めて次第に「祭司」化し近代化とともに廃れていったのに対し、「ユタ」は、さまざまな弾圧を受けながらも人間の問題解決に一定の役割を果たしており、この役割をいかに科学のものさしで評価し今日の社会機能に移行させていくかが大きな関心を呼んでいる（大橋、1983他）、とまとめられるであろう。

3. 本稿の目的

本稿では、こうした「ノロ」と「ユタ」の分類や定義について民俗学的・社会学的に詳細かつ厳密に整理することは手に余るため、行わない。日本の他の地域、世界各国の宗教的職能者の歴史を考察して「ノロ」と「ユタ」の特徴を際立たせることもしない。本稿で考察する「ノロ」「ユタ」の機能は、互いに厳密に分けられるものでもなく、他の地域では見られない沖縄特有のものでもない。ここでは、筆者が出会った神人Sさん、Cさんとの1998年春のやりとりを主なテキストとして、沖縄の宗教的職能者である「ノロ」と「ユタ」について、それぞれの「祈り」が共同体の中で果たしてきた機能を切り口として心理臨床の立場から考察し、それぞれの新たな機能の記述の基軸を提唱すること、ならびに、「ユタ」に比して関心を呼ばなかった「ノロ」の役割の今日的意味の再評価を目的とする。

4. 方法

(1) Sさん、Cさんと筆者のかかわり

Sさんは沖縄本島北部の村の神役を務める女性（1998当時60代）である。彼女は巫病やさまざまな不思議な体験を経て、神の道に入った。また、自らの体験や仕事の意味について文化人類学的に研究していた。筆者は病院の研修生として沖縄に在住している際（1995頃）Sさんと出会う機会を得、紹介された。

Cさんは、Sさんと同じく本島北部の根神（1998当時80代）である。後述のような経緯で、筆者はSさんからCさんを紹介された。

(2) 本稿掲載のデータ収集の手続き

1998年当時、筆者は年に数回、2週間程度の日程を取って沖縄を訪れ、フィールドワークを継続していた。同年春、訪沖の機会を得、取材先のひとつとしてSさんに連絡を取り、3/31に

本島北部のSさん宅を訪れる約束をした。その取材では、あらかじめ質問を準備するなどして構造化された面接を行うことはしなかった。また、その場で録音やメモは取らず、Sさんに誘われ、行く先に筆者も同行し行動を共にする形で時を過ごした。筆者は宿に戻ってから、当日の出来事、Sさんの語った内容などについてノートに筆記した。本稿での記述の元になったデータは、このときのフィールドノートである。

筆者は、Sさんに会うこと、可能ならば尋ねたい事柄を決めて本島北部を訪れ、Sさんの語りに耳を傾け、共に野山を散策し、食事をした。Sさん宅にいる間、集落の知り合いが手土産を持ってSさんに会いに来ることが複数回あり、しばらく同席して茶飲み話をしていった。調査というよりは、Sさんが面白い話をして皆で笑っている時間がほとんどであった。しかし、そうした面白おかしい話の中に、沖縄の民俗宗教に関するSさんの持論や鋭い指摘、学術的に重要な情報がこめられていた。また、一見他愛のない四方山話に思えるエピソードも、後述のように、Sさんの暮らしぶりをうかがい知り共感的に話を聞く上で大いに役立った。そのことが、より、筆者に「ノロ」や「ユタ」に関する心理学的考察を深めさせる要因になっている。

筆者はSさんを客観的に観察していたのではなく、Sさんと筆者は互いに影響を与え合いながら時を過ごしたのであるから、その時間を可能な限り誠実に記述したい。したがって、その場の記述や考察の対象には、筆者自身の言動や感情なども含まれる。

(3) 調査の経緯

1) 日時 1998.3.31. 午後 ~4.1. 午後

2) 場所 沖縄本島北部のSさん宅および集落、Sさんの集落、周辺の山、及び他の集落、Cさん宅

3) 経過

1998.3.31.、筆者は Sさん宅を訪ね、Sさんの車で周辺の山を案内された。周辺集落の殿内(トウンチ=拝殿)、Sさんの集落にとって重要な山、御嶽などをめぐり、食堂で昼食を取った。

その後Sさん宅に戻って休憩し、Cさん宅に案内される。同日は村内の宿に戻る。

1998.4.1.午前、Sさん宅に向かう。集落内の重要な場所を案内された後、行事に同行する。その後、Sさん宅にて軽食を取りながら休憩し、昼過ぎにSさん宅を辞した。

次項では、厳密な時系列ではなく場面ごとに次の構成で神人Sさん・Cさんと筆者とのやり取りを記述し、次々項で考察を加えたい。

1) 野山の散策

2) Sさん宅でSさんが語った話題と筆者の応答

3) 筆者からSさんに特に尋ねたり伝えようとしたりした事柄

4) Cさん宅

5) 集落行事への同行

4. 神人のエピソード

(1) Sさんとのやりとり (1998. 3.31.~4.1.)

筆者は、ヤンバルにあるSさんの家を訪ね、話を聞く機会を得た。Sさんは、筆者を食堂に連れて行ったり、集落内の自宅で軽食を作ったりしてもてなした。

1) 野山の散策

Sさんは村落周辺の拝所について由緒を語り地名について蒞蓄を述べながらドライブで案内した。途中、殿内(トゥンチ、拝殿)の脇にある桑の実を取って筆者に勧め、二人で食べた。筆者はこれまで他のさまざまな場面で「一木一草たりともとってはならない」と聞かされていたので少し拍子抜けしたような戸惑いを覚えた。無頓着にふるまって大丈夫かという不安と、神人が良いといっているのだから間違いないという気持ちとが入り混じり落ち着かない感じがした。同時に、神人だからと相手をかしまらせないSさんの気さくさや優しさも感じた。森に入って二人は山菜をとり、野イチゴをもいで一緒に食べた。Sさんはおおらかにひょうきんに振舞い、筆者は文字通り道草を楽しんだ。ただし、沖縄の山に不慣れなヤマトウンチュである筆者を気遣ったSさんから、決して茂みには入らないようにと何度も注意された。ハブがいるからということであった。クワズイモに触れないように、とも言われた。別の場面で、他の50代の人が、「沖縄に50年生きているがハブなんか見たことない」と言って全く臆することなく山に分け入っていたのと対照的であった。

Sさんは、ドライブをしながら、自らの集落の大事なムイ(御嶽、ここでは山)が見える場所、さらには集落の奥の重要な御嶽に筆者を同行させた。Sさんはそこで祈りを捧げた。御嶽を離れ道に出てドライブを再開すると、ハブがいると言った。わずか2日の間に、Sさんは数回ハブを発見したが、筆者には見えないことのほうが多かった。Sさんによると、以前に、御嶽での拝みで、岩の割れ目からじっとこちらをうかがっていて容易に動けなかったこともあったとのことである。筆者は、わずかな間にこれだけハブに遭遇するのは神人ならではの巡り合わせなのかもしれないとも思った。

2) Sさん宅にてSさんの語った話題と筆者の応答 ()は補足、〈 〉は筆者の発言の大意。

時には近所のひとについての噂話、Sさんの子ども時代、街に出てそばを食べたことやおやつの子キアギ(=揚げかまぼこ)、集落の昔の暮らしのエピソードなども語られた。たとえば、昔、富くじの賞品は米、塩(米か塩か記憶、記録が不明瞭)や菓子(タンナファクルーなど)であったが、係が、「富士の白雪~」とか「食べたら三日月~」などと節をつけてユーモアまじりに紹介する。当たった人は、そのヒントに基づいて賞品を得、実際に菓子を三日月になるように食べて見せるなどのおもしろいパフォーマンスをする、とのことであった。際立って豪華な賞品がなくとも村人どうし、知恵とユーモアを出し合って豊かな時間を共有していたということがうらやましく、高価な家電品などでさえ存分に喜ばずゲームに遊んでもらって時間を過ごす世代は、却って貧しく人間としての大事な能力が弱くなっているのではないかと考えさ

せられた。

以下に、Sさんの語りのうち、本稿での「ノロ」と「ユタ」に関する考察に用いた部分を抜粋して記述する。

①当時、沖縄ゆかりの有名人が関係する悲惨な事件が報道されていたことに関して、Sさんは次のように述べた。

家では屋敷の御願をし、風に乗ってくる「邪」を払う。村単位では、村の入り口で御願をし、村に入ってくる「邪」を払う。ヒヌカン (=家の香炉) と村の香炉が対になって働く。有名な人は世界とつながっているから、「邪」も世界からくる。家、村の人がこのことに気づかないといけない。その有名人ゆかりの地では(近代化を標榜して祭祀組織を壊し)組織だってやっていないから、このような事件が起こっている(つまり自分たちはそういうことを防ぐ役割を担っている。)

②近隣集落のエピソード

ノロの(統括していた、ゆかりの)地にいろいろの建物を建てたらセヂ (=靈感、霊力) の高い人が神衣装の人を見たり、有能な人が13人も亡くなった。ユタに見せて(このような不思議・不吉な現象の原因と対策が分かり)、祭をやって鎮めた。

③ハブについて

ハブは第三者からみれば害虫だが、神生まれの (=神の使命を持って産まれた、霊力の高い) 人には神の使いである。ハブは、神から人に遣わされる。人は、ハブに神への伝言を託す。一方、神人は、こいねがう。そして神からのものを人に与える。逆はできない。ハブは殺されて初めて、人間が神のメッセージを受け取ったと伝わる。

咬まれたら殺さないで病院にもいけないというタブーがある。殺したら、咬む姿でアジマー (辻=人の踏むところ)、浜に埋め、ハブのいない離島の方行けと言う (つまり、行けない)。殺さないで動くとまた道に出てくる。そうなったら、今度は逆に殺してはいけない。

④夢について

神の道に入る前、不思議な夢を見た。(先程の御嶽に関する不思議な夢も説明する。)昔は夢の意味を長老が言った。今は、人びとは不安からユタに確かめに行く。その夢を見た人が自分でしかるべき拝みをするのが本来のあり方。

⑤遥拝場所の位置づけ

村は、ムイ (=御嶽) -宮-ビジュル (霊石。海に不思議な様子で浮かんでいるのを獵師が拾ってきたものなど) -海が一直線になっていて、御願 (ウガン) を通す (=宮からムイを遥拝する)。

⑥屋敷のつくりの話

来訪者との話から近所で屋敷の作り方がおかしい人に悪いことが続いている、という話になった。

⑦海神祭

神人が「ウンコ〜イ、ウンコ〜イ」と、地面に弓をつけてこいねがう。(しぐさや具体的な

言葉について説明する。)

⑧クワズイモの話

本土から来た学生が御嶽のクワズイモをおもちゃにして手折り、手がグローブのように腫れた際、「ここの御嶽は私の受け持ちではないしこのようなことは本来の職分でないから通るか分からないけど」としながらも、御嶽の神に「この人たちは内地から来た学生で、何も知らないのです。どうか許してあげてください。」と詫びてとりなす祈りをささげ、彼らの腫れがおさまったことがあった。

3) Sさん宅にて筆者からSさんに特に尋ねたり伝えようとしたりした事柄

Sさんと筆者がともにいる間は絶えずSさんが話をし、筆者はただ聞いているのが精一杯で積極的に質問や発言をするようなことはほとんどなかった。筆者にはあらかじめ用意した具体的な問題意識もなく、また、Sさんの語りに口を挟むこともしなかった。しかし、話を聞いているうちに強く感じた以下の二点については返した。〈 〉は筆者の発言の大意である。

①Sさんは、ノロについて 4-(1)-2)-①(有名人のエピソード)、⑦(海神祭)のような記述をし、特に「こいねがう」という概念を強調した。ユタについては、4-(1)-2)-②(近隣集落の話)、⑥(屋敷のつくりの話)のような語りをした。これを聞いて筆者に次のような仮説が浮かび、伝えたい、確かめたいという気持ちが強くなり、質問をした。

〈ノロは“こいねがう”お祈りをするのに対して、ユタは“お詫び”の祈りをするんですね。〉よく分かっているね。ユタは、苦しんでいる人の過去を調べて三代前とか百年前の先祖が成仏していないから、などと言う。そのようなことが起きて百年もほうっておくなんて。私たちは、ユウ(=豊作、幸)をこいねがうことで、そういうことがおきないようにしようとしている。信仰とは、感謝と反省と、こいねがうこと。ユタは、こころの姿勢を正さないで恐怖を植えつける。セヂ(=霊力)は一緒なのに、ユタは祈りを通せない。セヂを使う側に心がないから。ユタ一代で家が崩壊する。

②また、Sさんが筆者を案内した村内の御嶽、山、森は美しく、目に見えないある種の力があふれていると筆者は強く感じた。さらに、4-2)-⑤(遥拝の位置づけ)の語りのように、それぞれの場所、地形、装置に意味が付与され、全体として完結した一つの宇宙を形成していることも分かる。

〈Sさんが連れて行ってくれた御嶽は、天地海とつながっている中心であることが良く分かりました。Sさんにとって、その場所は大事なところなんですね。(そんな大事な場所を見せてくださってありがたい。)この村は小さいけれど宇宙全体が詰まっている。〉心理学の先生たちは私の不思議な体験を聞いて面白がって、私の生活を知ろうとしない。私の体験は、この村での毎日の生活から出てきたものなのに。祭りでは、自然への感謝と反省を表す。セヂ的なことばかり見ようとしても、生活を見ないと大事なことは見えない。

あんたはよく分かるから、Cさんに紹介しよう。民俗学を勉強する人はみんなこの人のところに行くという人。

4) Cさん宅

SさんはCさん宅に筆者を同行させ、「他の人とは違うから。あんまり分かるから連れてきた」と紹介し、一緒に村の行事のことなどを話した。CさんはSさんの質問に答え儀式のことなど図を描いて説明したりSさんと資料を見あったりしていたが、筆者には分からない話も多かった。SさんにとってCさんは頼りになる大先輩で、師匠のように慕っている様子であった。(後にCさんのことを、Sさんは、母であり、姉であり、友であり、師であり、と言っていた。)ただし厳しい師弟といったタテの関係ではないようで、Cさんは筆者にも茶を勧め、Sさんと二人で冗談を言い合って笑いの絶えない楽しいひと時であった。それでも筆者は初対面のCさんにどう思われているかと緊張しており表情も行動も硬かったと思返される。

5) 集落行事への同行 二日目の朝食後、筆者はSさん宅を訪問した。Sさんは、集落行事の拌みの様子を一緒に見ていて良いと言った。Sさんは細い小道を縦横に歩きSさんの用事を済ませがてら集落の大体の地理がわかるように案内しながら、ビジュアル(霊石)や謂れの残る場所にも筆者を連れて行った。それから拌みがあった。Sさん一人で、服の上から神衣装(白い着物)を羽織り、宮で行った。筆者はSさん(宮)と海、ムイ(御嶽)を結ぶ直線にはかからないように気をつけて後ろに控えた。しかし、拌まれている本体は「ムイ」であり、その「ムイ」と「宮」を結ぶ直線が大事なのだと思うと、「宮は所詮建物」という気持ちが筆者にわいてきた。前日、別の殿内で桑の実を無造作に取って与えたSさんの気安い様子、前日までかなり硬かった自身のありようを変えたいという気持ちも影響し、筆者は、Sさんの祈る姿をよく観察しようとしてやや無遠慮に宮の一角に少し入りこんでいた(歩いて入ったのではなく、しゃがんだ姿勢で敷地を囲う敷居を越していた)。すると拌みをしていたSさんが振り返り、「あんたはここに入ってはいけない。」とたしなめた。温厚で柔和な表情のSさんが一度だけ見せた毅然とした表情であった。その後はもとのSさんに戻り、自宅で軽食を勧めながら面白い話をしたが、筆者には気まずさが残った。昼過ぎ、筆者はSさん宅を辞した。

5. 考察

(1) Sさんとのやりとり

Sさんと筆者が「出会えた」要素は、筆者なりに感じたノロとユタの違いの捉え方を伝えたこと、Sさんの不思議な体験だけを取り出すのではなく普段の生活に関心を示したことによるものが大きいであろう。Sさんは、筆者が「ノロ」と「ユタ」の違いについて感じたことを伝えたとき、感心し、一気に心を開いた様子だった。おそらくSさんは、学者たちの、仮説の確認に来るような、あるいは「不思議なこと」を掘り出して帰ろうとする態度に困惑していたのであろう。筆者が若く無知であったがゆえに、却って素直に村の生活に感心しSさんの仕事を評価したことで、信頼を寄せてもらえたのだと考える。

Sさんが筆者を同行させた御嶽には、世界中のすべてのものをつながっており何もかもが凝縮しているような、満ち足りた「気」が漂っていた。Sさんの住む集落は狭いシマだがすべて

のものがそろっており、宇宙全体ときちんと結びついて、それぞれ生きていると強く感じた。

筆者は、ユタたちが、沖縄や自身の出身地の集落を、世界の中心であるとか、天・地・海とつながっていると述べていたことに対して、「水が下に流れてやがて海に通じ、水蒸気が天に昇って雨となり地に降ると考えれば理解できる」と考えようとしても、一種の大言壮語のようについていけない感じを抱いていた。しかし、このときSさんに同行して御嶽に入り、説明を聞いたことで「天・地・海」とのつながりについての説明に初めて納得し「たしかにこの集落を中心として天・地・海が位置づけられ、互いにつながっている」と実感できた。この御嶽はSさんが根神を引き受けるに当たって見た夢にも出てきた、Sさんにとって重要な場所であることも語られた。そのような大事な場所に筆者を受け入れてくれたことがありがたかった。

こうした実感は、筆者がSさんと行動をともにし、Sさんの出身集落、拝所や森を回って、Sさんの生活ぶりにじかに触れることによって初めて得られたSさんの暮らしへの関心・共感から生まれたと考えられる。心理臨床では、クライアントと行動をともにし生家を訪ねたりすることはむしろ禁止されているが、こうした関心や共感を忘れては成り立たない。筆者は自らの生育歴とかけ離れたSさんの暮らしについて、臨床家としての目ももちつつ、初心者として素直に行動したことが新しい発見をもたらすという形で幸いした。これまでのユタたちの話も、必ずしも彼女たちがSさんに比べて胡散臭いということではなく、筆者が彼女たちの話に圧倒されて疲れてしまい、共感的に話を聞く余裕をもてなかったために彼女達の生活感覚を実感として受け止めていなかったことも要因となっているであろう。

実はこの訪問の翌年わかったことには、その御嶽は村の人は誰も入らない所であった。ある祭の際にSさんから女性限定で立ち入りを許されたが、Sさんについて入ったのはよそから来た研究者や旅行者のみであった。地元の高齢の女性によると、彼女はそこには生まれてから一度も行ったことがない、とのことであった。わずか徒歩10分程度で行けるところであり、筆者の聞いた範囲では厳しい禁止がある様でもないのだが、誰も行こうとしないのである。少なくとも一部の住民の行動には、この御嶽の霊的な力が今も影響を与えていることが分かる。なお、地元住民が御嶽に入らない理由については更なる考察を要するが別の機会に譲る。

一方、宮に上がったときの筆者には、Sさんの話を丸ごと聞くのではなく、その中から最も大切な「本質」を見透かしてやろうというところがあった。前日にSさんは筆者が学者然とせずSさんの語るままに話を聞いたことで信頼を寄せてくれたのに、筆者はそのSさんの信頼に甘えて、正しくない方向へ欲を出してしまったところが失敗だった。前日にSさんよりキャリアも情報量も上とSさん自身が認めるCさんに「よく分かっている」「ほかの人と違う」と紹介されたことも影響していたと思われる。このときの筆者には、今後はよりCさんに話を聞くようにし、村の祭祀の「本質」に近づきたいという気持ちが芽生えていたように思う。しかしむしろ、Sさんは、これまでの学者たちの調査によって味わった苛立ち、不愉快さを正当なものとして表明する機会を確認し、ある程度筆者の勘のよさを評価しつつ、期待を込めて、まさに祈るような気持ちで筆者を丁重に迎え入れたのだと推察される。そのように思い至った経緯

は以下のとおりである。

このやりとりの2年後に筆者が本島北部に住みスクールカウンセラーとして働くことになったとき、SさんもCさんも意外なほど喜んだ。Sさんは自分の知人で気になっている若者について「きっとお世話になります。よろしくお願いします。」と筆者に頭を下げ、Cさんは「国からこんな人が遣わされた」と、集落をあげて歓迎するように取り計らった。村のために自らを投げ打って長年尽くしている二人にこのように分不相応に丁重に扱われ、筆者はありがたく思う半面戸惑い、困惑気味だった。郡部で生まれ育った年配の二人が学歴を評価している面はあるにせよ、なぜこのような若造に頭を下げるのか、解せなかった。

しかし筆者が本島北部に移住してまもなく、二人とも急死したのである。筆者は大変な衝撃を受け沖縄を離れたいとさえ思ったが、スクールカウンセラーの仕事を投げ出すわけにはいかなかった。SさんもCさんも、長年健康面での不安を抱え、村落共同体やの自然環境の崩壊を目の当たりにし、近い将来危機的状況が来ることを予見して、新しい分野の担い手の一人である筆者に賭けのような気持ちで後を託そうとしたのではないかと思ひ当たる。

そうすると、まさにSさん、Cさんの亡くなるのと相前後して筆者が本島北部に移り住み、スクールカウンセラーが配置されたことは偶然とは思えない。客観的・合理的に説明のつくことではないが、筆者は、SさんCさんの仕事を自分なりのやり方で引き継がなくてはならない、と考えるに至った。このような筆者の思考の展開および記述は一般的な近代科学の手法になじまないが、事実であり、本稿に必要な要素と考え、敢えて組み入れた。なお、Sさん、Cさんの役割を引き継ぐと感じたことに関するこれ以上の記述は別稿に譲る（片本、2000,2001）。

(2) 祈り

松居（1999）によれば、「祈願とは、自然界の力を借りて、人間の祈りを神々の世界に届けることである。火と水はともに祈りを届ける力を持っているが、天界の神々に祈りを届けるのは火の神であり、ニツラ（＝ニライカナイ。根の国、常世の国）の祖先神に祈りを届けるのが水の神である。」

「アイヌの古老小田イトさんは宇宙における人間存在の意義に「祈り」をあげられた。祈りはアイヌ語ではノミと呼ばれるが、人間以外のすべての存在はカムイであり、祈りとはカムイノミすなわち宇宙と人間、自然と人間、人間を超えた存在と人間、カムイとアイヌの本質的な関係に思いをいたらしめることである。アイヌは、日々カムイを認めカムイを感じ、カムイを理解し感謝し、カムイを迎え送る行為の中ではじめて自分を人間すなわちアイヌとして認識し存在することができる。こうした祈りの形態は、世界中で息づいていたはずのものである。」（松居、同）

心理学の知見では、個人が自他の分離を体験し社会の中に自らを位置づけることによってアイデンティティの確立が達成されると言われている。同様に、ひとが「人間とは何か」を考えるためには、「人の世」の外即ち異界・他界に思いをはせ、広いコスモロジーの中に人間存在としての自らを位置づけることが重要である。人の世の苦しみを、人の世の範囲でのみ説明し

ようとする視野の狭さには、限界が伴う。このような視野狭窄によって分断化されればらばらになった「個」が、人間としてのアイデンティティの確立や自己実現を図るには、「異界・他界」を視野に入れた宇宙全体を意識するための行為として、「祈り」は重要な要素となる。

Sさんの「祈り」は、当初筆者が考えたような抽象的で当てにならないものではなく、具体的かつ切実な、生きるための「異界・他界」とのやり取りであった。「異界・他界」へ人間の「生」がかかったメッセージを届ける使者たるSさんの責任は重大であると、ハブや夢を用いた神からのメッセージ受信の具体的な手法とその根拠、ユタの位置づけと対比させて、Sさんは説明している。(4の(2)の①(有名人の話)、③(ハブの話)、④(夢の話)、⑤(遥拝の位置づけ)など)

(3) ノロとユタの機能

Sさん、Cさんとともに「ノロ」の系統に分類できる。既述のやり取りを事典の記述、桜井、佐々木、高江洲の整理と照らし合わせても、問題ないと考えられる。また、Sさんはユタに言及しており、ユタの存在を完全に否定しているわけではない。さまざまな現象に関する説明原理を共有していることも、既述のやりとりからわかる(4の(2)の②(近隣集落の話)、⑥(屋敷のつくりの話)など)。筆者は、Sさん、Cさんとのやりとりからノロの役割だけでなく、ユタについても考察を深めるヒントを得られた。

1) 「ノロ」

Cさんの集落の祭では、神人が集落の御嶽を回りながら神歌を歌ってニライカナイの神、山の祖先神を招きつつ、御嶽のアサギ(=神が降臨する建物)に向かう。アサギでは神人から神酒が振舞われ、参列者の健康を願う。続いて、アサギの前の広場で神人が杖で地面を突き、地にひれ伏して世果報をコヒネガウ。クライマックスはアサギでの「神遊び」である。神歌と祈りに応えて降り立った海からの来訪神、山の祖先神と一体化したノロ、根神が舟遊びを模した所作をし、参列者に海の幸、山の幸を撒く(筆者の1999以降の取材、仲松、1990)。

Cさんによると、昔は神役も20名ほどおり、神衣装をまとい神歌を歌うさまは大変美しかったそうだ(1999の取材時の語り)。樹木が生い茂り生命力と神秘的な雰囲気を感じられる御嶽の中で、神女たちが衣装をまとい勾玉やかんざしなどで美しく身を調べ朗々と神歌を歌う情景を想像してみる。その場に居合わせ、美しさや神々しさを目の当たりにした者に、神と一体化した神女たちから海・山の幸が配られたときの感動は、まちがいなく参列者に「神に守られている」と言う安心感を呼び起こし、「生きるよろこび」や「いのち」の実感につながっただろう。

また、その御嶽は遺跡でもあり、Cさんが子どものころには御嶽のある場所には宝石と思われる色とりどりの小石が転がっていたそうである。Cさんたちはそれらを「アリの枕」と言ってままごとやおはじき遊びをしたと言う(同、1999)。子どもが宝石(遺跡の出土品)をおもちゃにする話など聞いたこともない。その豊かさ、美しさに筆者は圧倒された。

しかし、今は高齢のノロ・根神たちが体の不調をおしてどうにか祭を続けている状態である。

彼女たちのほとんどは神歌を暗記しておらず、しきたり通り行事をこなすことで精一杯という印象を受ける。かつて祖先が生活に使っていた御嶽の湧き水は濁れ、勾玉などの祭具は盗難によって失われた。「アリの枕」が出てきた付近はほとんどコンクリートで固められ、鉄塔が建つ（2000～2006、筆者の取材）。かつての神の威力は、想像によってしか垣間見ることができない。いかに霊力の高いノロでも、神の威力を共同体の成員が共に実感してくれていると言う前提がなければ、これまでとおりの使命を果たすためには自らの命を削るほどの負担を背負うことになってしまう。今日、そうした負担に耐えかねて参与を拒否する人、集落の行事に関心のない村人もいる一方で、若い世代にも、こうした行事の尊さを肌で感じ、守り伝えていこうとする者もいる。そのような人達は、人が人として生きていくには「生きている実感」や「いのち」の本質にふれる体験、「感動」が必要だと感じているのではないかと筆者は考えている。

ノロは祈りを通して共同体の努力を神に申し伝えて神を招き一体化し、共同体成員に幸を配る。その際の感動によって、人は「神に守られている」実感、安心感を抱く。これにより人は自らの命を蘇らせ、幸せに生きる原動力を得る。ノロの祈りはエンパワーの祈りである。

2) 「ユタ」

Sさんの話を聞いた当時、筆者は「こいねがう」ことは確実性が薄く遠慮がちで消極的な気がしたし、「詫びる」祈りだけではきりがないように感じた。しかし今では、神が聞き届けてくれるように「こいねがう」ところにノロの使命があったのであり彼女たちはそこにかけていて、ユタとは違う使命を帯びているとの矜持となっていたと思う。同時に、詫びる祈りもまた必要なのである。さらに、Sさんの4-(2)-2)-⑧(クワズイモの話)の詫び、とりなしの祈りは、Sさん本来の職分ではないと述べながら、行きがかり上、Sさん自身がその役割を担っている。

人間は過ちを犯すが、その過失を回復する手立てがあることで救われる。回復の手立てがなければ人は追い詰められ、極端な結論に飛びついてしまうであろう。筆者自身も、本島北部に移住してから、自分の意図に反して地元の人に迷惑をかけ不愉快な思いをさせたことがある。そのときCさんが間に入ってとりなし、筆者とともに頭を下げてくれた（2000、筆者の体験）。筆者は、昔は子どもが悪いことをして親が叱ったときに祖父母が慰めとりなしてくれたというのはこういうことかとありがたく、また、大家族の人間関係の豊かさをうらやましく想像した。もちろん、昔ながらの大家族には特有のひずみがあり、現代人はその窮屈さから抜けるために核家族を作ったのであった。しかし、今日の若者たちを取り巻く人間関係は狭く、接する人間の数が少ない分行動の指針となるモデルも選択肢も狭まり、極端な結論に走りやすい。筆者が学校現場で会う児童・生徒にも、AでなければBしかない、という思考・行動パターンが目につく。「生きていてもしょうがない」「死ぬしかない」「相手に消えてほしい」などと訴える子どもたちは、過失を救ってもらったり、他の選択肢を与えられた体験が皆無に近いのかもしれないと想像する。Cさんはユタではないし生身の人間に対して頭を下げて筆者のことをとりなしたのだが、4-(2)-2)-⑧(クワズイモの話)とあわせて、ユタの仕事についても

ヒントを得ることができた。即ち、ユタのしようとしていることは、次のようなことだと考えてはどうだろうか。

異界・他界のことを知らない赤子のような人間が犯した過ちによって、世界にひずみが生じ、神や祖先が迷惑しているという異界・他界からの訴えをすくいにとってこの世の人間に伝えつつ、この世の人間のことをあの世にとりなすことである。

ユタの災厄の説明原理は、日本で古来見られた「ノロイ・タタリ・イワイ」の信仰形態と似ているように見えるが違っていると筆者は今のところ考えている。小松（1999）は「ノロイ・タタリ・イワイ」は因果的な連鎖の関係にあるとし、その連鎖について、以下のように説明した。「災厄の発生→タタリとしての認知→怨霊の示現→怨霊の特定→怨霊の怨霊化の原因の特定、と言うように時間を遡及する形で思考される。この災因の解明の最も有効な手段とされたのが、「占い」（裏を見ること）である。災因が発見（＝虚構）される時、今度は災厄除去＝災除論のメカニズムが発動することになる。すなわち、怨霊への謝罪、怨霊化の原因の除去、怨霊の怨念の沈静化のための「贈与」といったことを含んだイワイ・マツリや、強力な神仏の力を借りての怨霊の制止・追放の儀礼が執り行われるのである。そしてこのイワイ・マツリを受け入れたとき、その「怨霊」は怨霊としての性格を失って「和霊」に転化するのである」（小松、1999）。筆者の沖縄本島のフィールドワークの範囲では、人間が過ちを犯したことで怨霊のタタリが起こった例は、怪談での幽霊の復讐話などでしか聞かない。実際にユタが小松の言うような「ノロイ」や「タタリ」の概念を筆者に示したことはない。むしろ祖先などが、生前に自らあるいは後の人間が犯した過ちによって苦しみ、助けを求めて知らせを送ってくるのだと説明されるのが一般的である。

3) ノロとユタ

藤見（1992）は、共同体内でのシャーマンの役割について次のように述べている。「共同体内のたった一人が病を患った場合でも、それはその個人を含んだ共同体全体のバランスのあり方に問題が生じたためだと考えられ、共同体全体に向けての治療が同時になされる。なぜならば、このようにしてこそ初めて一個人も真に癒されると考えられているからである。シャーマンは、個人や共同体、さらには自然や宇宙全体の調和やバランスを常に維持するために、多層的意識やリアリティ間を自由に往来し、個人と共同体とを結びつけるための仲介者兼セラピストなのである」（藤見、1992）。

佐々木（1991）は、ツングース族の氏族シャーマンの例を挙げ、「そこでは現実の幸不幸、運不運がたえず霊的存在のありようと結びつけられて判断される。そして、この霊的存在を巧みに統御しその力が個人と社会に及ばないように絶えず努力している人物こそが、シャーマンにはほかなら」ず、「社会（氏族）の“安全弁”（safety valve）である」、と述べている。

シャーマンは共同体全体を見渡しバランスを調整することを期待されていた。しかし、ノロは「多層的意識やリアリティ間を自由に往来」するほどの能力も働きも期待されていない。また、ユタは、当人が主観的に共同体全体のバランスを保つ使命を感じていたとしても、共同体

側からそのような役割を期待されていない。藤見、佐々木の言うような非近代社会でのシャーマンの絶大な能力と機能に比べれば、ノロやユタの機能は限定的である。そうした彼女たち神人のよりどころとする世界観は次のようなものではないだろうか。「人は、神に守られている。そのことを確認させ、人にエネルギーを与えるのが「ノロ」である。神はタタリや罰を与える存在ではない。しかし過ちを犯すと世界のバランスが狂い、目に見えぬひずみが生じる。すると神が働けなくなり、守りがうすくなる。それが放置されると人にも分かるゆがみとなって現れる。そのようにして生じた人の苦しみをすくい取り、あの世に人の過失をとりなし回復するのが「ユタ」である。」

本稿で考察の切り口とした「祈り」をめぐって、「ノロ」と「ユタ」の機能を整理すると、次のようになる。

「ノロ」はユー（＝よい結果、実り）をこいねがう祈りを神に捧げ、神からの賜物を共同体代表として受け取って分配する。

「ユタ」は、「悪い結果」が起こった経緯について神のメッセージを受け取って人に解説し、人の詫びの気持ちを伝え、とりなす祈りを捧げる。つまり「悪い結果」の修正を企図する。

このような機能を持つノロ、ユタの存在によって、沖縄の共同体では二重に「安全弁」が作用し、成員が守られることが企図されていた。（ただし、本稿ではこれが、歴史上のどの時代に当てはまると厳密に規定できない。）

「ユタ」が期待されている社会的機能として、「問題・悩みごとの解決」と「治療」がある。それゆえ、Sさんも時にはユタに言及しながら全面的に支持しようとはしないように、表向きにはバッシングを受けようとも、ユタは根強く今日まで息づいてきた。これに対して、「ノロ」の機能は祭政一致の行政機構を翼賛する一種の公務員でありすでに形骸化したもの、近代化で廃れていくものとして、今日的観点から意義を見直すという形では、相対的に大きな関心と呼ぶことはなかった。しかし、どちらも、時によって主役になったり補助的な役割になったりして位置を入れ替えながら、ともに社会の中で必要な機能を果たしてきたことは間違いない。そして、今日の社会でも、この両者の機能はともに必要とされている。

(4) プリベンション、インターベンション、ポストベンションとメディカルモデル、コミュニティモデル

1) プリベンション、インターベンション、ポストベンション

高橋（2006-2）は、以下のような「自殺予防対策の三段階」を挙げ、いずれも重要だと述べている。

- ① プリベンション（予防：自殺の要因の除去・自殺予防教育）、
- ② インターベンション（介入：早期発見・早期対処）、
- ③ ポストベンション（事後対応：遺された人へのケア）

2) メディカルモデル、コミュニティモデル

さらに自殺予防の二大方針として、以下の二つのモデルをあげ、両者に関連を持たせて長期

的に実施することが必要である、と述べている。

①メディカルモデル：自殺に直結しかねないころの病の早期発見と適切な治療への導入

②コミュニティモデル：健康な人を対象とした教育・情報提供・ころの病に対する偏見を取り除く

これは自殺予防に限らずさまざまな危機への対応として典型的なモデルと考えてよいと思う。また、リハビリテーションや障がい者福祉の現場では、個人の中に問題があると考え「メディカルモデル」から、社会が障壁をつくっていると考える「ソーシャルモデル」への転換が言われるようになってきた。こうした発想を参照し沖縄における心理臨床家の今日の役割を次項で考える。

5. 終わりに

我々が心理臨床の場で出会うケースは、100年前からのボタンの掛け違いが「今・ここ」に影響を及ぼしているようなものが多い。放置すればさらに深刻なことが起きる可能性が高いから、事が起こってしまったときの対応は次の悪いことの予防と言う意味も持ち、単純に、予防—介入—事後対応、と割り切って分類できない側面もある。また、心理臨床家は簡単に「社会改革」などと言って動き回らないことに存在価値があるという考え方もある。しかし、スクールカウンセラーは、ただ相談室に座ってクライアントを待つだけでなく、教員集団に働きかけたり、校内研修やPTA講話、地域の専門職や行政機関との連携などを行ったりすることも求められており、コミュニティモデルに開かれた位置にある。筆者がスクールカウンセラーとして沖縄本島に居住し心理臨床活動を行うことで、メディカルモデルに基づいた少年少女の問題行動や病理だけでなく、ソーシャルモデルに基づいた、社会のひずみが個人に現れている「沖縄の／ヤンバルの」「子ども」という彼らの生きづらさが見えてくる。

共同体の衰退に伴い「ノロ」の機能が立ち行かなくなっている今、我々心理臨床家も、問題が発生して百年後にボタンのかけ違いをほどいていくような「ユタ」的機能に加えて、もう少し相談室から出て社会に発信していく仕事を果たしても良いのではないか。それは単に神人の予祝機能をまねることでなく、自殺予防対策の例でのコミュニティモデルのような、臨床家として社会に新たな発想のヒントを示し人々をエンパワーすることだと考えてはどうだろう。つまり、心理臨床の場でこそ見えてくる真実をとらえ、コミュニティという一つの単位の視野で問題の発生機序や回避の方策を社会の人々に発信していくことが、臨床家、研究者の今日における社会的使命の一つではないだろうか。

心理臨床家が期待される機能は、これまで主として「ユタ」的機能であった。つまり、問題解決や心の病の治療にむけた援助の提供である。しかし今日、心理臨床家も「相談室を出よう」という要請が盛んになってきている。今日ニーズの高いスクールカウンセラーや産業臨床の現場で最も評判が悪いのは、「相談室にこもって待つだけの受身のカウンセラー」である。我々も、今後は「百年もほうっておく」ようなかわりだけでなく、「異界」「他界」について何らかの

考慮をしつつ「世果報をこいねがう」機能を担っていく必要があるし、そこに新たな心理臨床の可能性があるのではないか。

引用文献

- 藤見幸雄 1992 「シャーマニズムと心理療法」『心理臨床大辞典』培風館
- 林 俊子 1992 「祈りと心理療法」『心理臨床大辞典』培風館
- 小松和彦 1999 「ノロイ・タタリ・イワイ」山折哲雄他編『民俗宗教を学ぶ人のために』世界思想社
- 松居 友 1999 『沖縄の宇宙像 池間島に日本のコスモロジーの原型を探る』洋泉社
- 中井久夫 1990 『治療文化論』岩波書店
- 大橋英寿 1983 「信仰治療と現代医療の機能関連—沖縄シャーマニズムへの社会科心理学的接近—」東北大学文学部研究年報 第34号
- 大嶺 顕 1973 「祈り」小口偉一、堀一郎『宗教学辞典』東京大学出版会
- 桜井徳太郎 1973 『沖縄のシャーマニズム—民間巫女の生態と機能—』弘文堂
- 佐々木宏幹 1983 「憑霊とシャーマン—宗教人類学ノート—」東京大学出版会
- 佐々木宏幹 2000 「ユタ」福田アジオ 他『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館
- 佐々木宏幹 鎌田東二 1991 「憑霊の人間学」青弓社
- 下仲 弘 1971 「祈り」『哲学事典』平凡社
- 高江洲義英 1993 「呪術と精神医療—南島巫女をめぐる現在—」『岩波講座 宗教と科学8身体・宗教・性』
- 高橋祥友 2006 『自殺予防』岩波新書
- 高橋祥友 2006.9.9. 「働き盛りの自殺を防ぐには」自殺予防対策講演会資料
- 高梨一美 2000 「ニーガン」「ヌル」福田アジオ 他『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館

参考文献

- 井上 亮 2006 「心理臨床とシャーマニズム」創元社
- 片本恵利 2000 「沖縄の民間信仰の現在」山中康裕監修『魂と心の知の探求 心理臨床学と精神医学の間』創元社
- 片本恵利 2002 「ある神人の事例」『沖縄国際大学人間福祉研究』Vol1.1,No.1
- 仲松弥秀 1990 「神と村」梟社

要旨

沖縄の民俗宗教の担い手である「ノロ」と「ユタ」の機能について先行研究を整理した。神人とのやり取りをテキストとして分析・考察し、先行研究での分類の切り口に加え、「ノロ」「ユタ」の担う社会的機能について、よき世を「こいねがう」ことで病や不幸を予防する機能、犯

した過ちを「詫びる・とりなす」ことで危機を克服し、悪化を防ぐ機能とする発想を提案する。その上で、これら諸機能を受け継ぐ心理臨床家は、これまで「ユタ」のような過ちをほぐしていく機能を参照する発想から、より、「ノロ」のような、予防的・啓発的機能、共同体や社会に広く働きかけていく啓発性に着目していく必要性を述べた。

Prayer of “Noro” and “Yuta”, folklore religionists in Okinawa

Eri KATAMOTO

The present paper attempted to add new point of view on Noro and Yuta, folklore religionists in Okinawa, through considerations on their prayer. Noro wish good harvest and function to contribute toward enrich their community and empower people. On the other hand, Yuta pray to apology mens mistakes which have bad effects on gods, and beg perdon for them to adjust bad issues. Psychotherapists today may be proposed to take both functions in our community.